

表紙・目次等

権利	Copyrights 日本貿易振興機構（ジェトロ）アジア 経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) http://www.ide.go.jp
雑誌名	石油大国ロシアの復活
発行年	2005
出版者	日本貿易振興機構アジア経済研究所
URL	http://hdl.handle.net/2344/00017566

本村眞澄 著

石油大国ロシアの復活

目次

はじめに

ソビエト連邦の崩壊でロシア・カスピ海諸国の石油が注目されるようになった

iii

序章

ロシアの石油産業の特質

- | | | |
|-----|-------------------------------|----|
| I | ロシアには米国と並ぶ石油産業の長い歴史がある | 4 |
| II | ロシアの石油埋蔵量はサウジアラビアに次ぐ規模 | 9 |
| III | ロシアの石油産業は民営化、新規地域については国家主導へ再編 | 10 |
| IV | ロシア・カスピ海諸国の投資環境は相対的に良好 | 14 |
| V | ロシアからの石油・天然ガス・パイプライン輸出の現状と将来 | 15 |

第1章 帝政ロシア・ソビエト連邦時代に石油はどう開発されてきたか

- I 帝政ロシア時代のバクー油田開発 18
 - 1 石油時代の夜明けとノーベル兄弟による近代石油産業の始まり 18
 - 2 ロスチャイルド家とシェルによる世界市場への進出 27
- II ソビエト連邦の成立と石油をめぐる争い 32
 - 1 ロシア革命とバクー油田 32
 - 2 計画経済下の石油開発 37
- III ヴォルガ川・ウラル油田地帯の開発(第2バクー) 第二次大戦から復興へ 39
- IV 西シベリア油田の開発(第3バクー) サウジアラビアと並ぶ世界最大の産油国へ 46
- V 欧州への石油・天然ガスの輸出 外貨獲得と東側陣営の命綱として 55
 - 1 ドル・ジュバ・パイプラインと東欧の石油事情 55
 - 2 ソビエト連邦から東欧・西欧への天然ガスの輸出 59
- VI その他の主要油田地帯 61
 - 1 中央アジア 61

第2章

ロシア・カスピ海諸国の石油と天然ガス開発の現状

- I ロシアはどの程度の資源大国なのか 80
- II 快調な増産を続けるロシアの石油生産とその問題点 83
 - 1 エリツィン時代の大減産とプーチン時代の大増産 83
 - 2 欧米技術の影響力 86
- III ロシアの天然ガス生産の現状と問題点 94
- IV ロシアの石油法制と外国資本の導入 97
 - 1 ロシアにおける石油関連法体系 97
- VII 日本に関わり チュメニ、ヤクーチヤ、サハリン 74
 - 2 北カスピ 63
 - 3 テイマン、ペチョラ 65
 - 4 東シベリア 67
 - 5 サハリン 69

第3章

新規パイプラインの建設と国際連携の時代

- | | | | |
|-----|----------------------------|-----------------------|-----|
| I | ロシアの石油・天然ガスの生産の見通し | 172 | |
| 1 | 石油生産の見通し | 172 | |
| | 2 | ロシア石油産業の再編と外資の関わり | 102 |
| | 3 | ユコス・ホドルコフスキー事件の意味するもの | 123 |
| | | ロシアにおける石油精製の現状 | 134 |
| VI | ロシア東部の新規石油・天然ガス開発の現状 | 139 | |
| 1 | 東シベリアの石油・天然ガス開発 | 140 | |
| 2 | サハリン大陸棚の石油・天然ガス開発 | 144 | |
| VII | カスピ海諸国での石油・天然ガス開発 | 157 | |
| 1 | カスピ海は第二の中東か？ その埋蔵量と新しい油田地帯 | 157 | |
| 2 | カザフスタンでの外資参入の動き | 163 | |
| 3 | アゼルバイジャンの石油開発の現状 | 169 | |

- 2 天然ガス生産の見通し 179

II ロシアの既往石油パイプラインとターミナル

- 1 バルト海のターミナルと石油パイプライン 184

- 2 バレンツ海からの原油搬出 186

- 3 中部欧州（ドルージュバ・パイプライン） 189

- 4 黒海（特にプロディ＝オデッサ・パイプラインに関して） 190

- 5 極東ロシア 193

III ロシアから欧州市場への天然ガス・パイプライン計画

- 1 ヤマル半島ガスパイプライン 194

- 2 北ヨーロッパ・ガスパイプライン 196

- 3 ブルー・ストリーム 202

IV 東シベリアからのアジア向け石油・天然ガス・パイプライン

- 1 ナホトカ向けと大慶向けの石油パイプライン 204

- 2 コピクタ・ガス田から北東アジアへの天然ガス・パイプライン 215

- 3 チャヤンダ・ガス田から中国東北部への天然ガス・パイプライン 218

V カスピ海諸国のパイプライン計画 219

- 1 カザフスタンからの石油・天然ガス輸出 220
- 2 アゼルバイジャンからの石油・天然ガス輸出 229
- 3 トルクメニスタンの天然ガス・パイプライン計画 235

I 原油価格の将来とエネルギー輸出 242

II 石油・天然ガスの今後の輸出市場 245

III プーチン大統領のパイプライン政策と優先順位 249

文献リスト 253

おわりに 255

付録 原油から作り出される石油製品／ロシア・ソ連の石油・天然ガス開発の歴史(年表)／用語解説・地質年表 259

索引 272

図表目次

ロシアの七連邦管区分図……………xiii
 ロシア・カスピ海諸国の堆積盆地分布図……………xiv

図 1 バクーとアプシエロン半島の油田と泥火山の分布……………19
 2 西シベリアにおける主要な油・ガス田の分布……………48
 3 ソ連・CISの石油生産(一九五〇—二〇〇三年)……………85
 4 ロシアの石油会社別石油生産量の伸び(二〇〇〇—二〇〇三年)……………88
 5 ソ連・CISの天然ガス生産(一九五〇—二〇〇三年)……………95
 6 ソ連・ロシアの石油関係政府機関、石油企業の推移……………106
 7 東シベリアの主な油・ガス田の分布……………141
 8 サハリン大陸棚の鉦区とパイプライン計画……………145
 9 カスピ海周辺の堆積盆地と主要な油・ガス田……………165
 10 『二〇〇一年までのロシアのエネルギー戦略』に基づく石油生産予測……………177
 11 『二〇〇一年までのロシアのエネルギー戦略』に基づくガス生産予測……………181
 12 ユーラシアにおける石油パイプライン・システム……………183
 13 ユーラシアにおける天然ガス・パイプライン・システム……………199
 14 東シベリアにおける石油パイプライン計画……………211
 15 カザフスタンから中国へのパイプライン……………228
 16 アゼルバイジャンからの石油・天然ガス・パイプライン……………233

表 1 帝政ロシアと米国の石油生産……………30
 2 ロシアにおける堆積盆地別の石油埋蔵量……………54

24	ロシアにおける堆積盆地別の天然ガス埋蔵量	54
23	東欧・西欧向けの主要なロシア・ガスパイプライン	60
22	ロシアの石油の確認可採埋蔵量	80
21	日本の石油鉱業連盟による主要国の原油・天然ガス残存埋蔵量評価	81
20	ロシアの石油・天然ガス生産と輸出	82
19	ロシアにおける石油の生産減退と回復の実態	90
18	ロシアの石油・天然ガス企業の特徴(一 二年時点)	104
17	ロシアの主要な製油所(一九九九年時点)	136
16	サハリン1～5プロジェクトの現況	154
15	CISにおける石油・天然ガスの確認および未発見埋蔵量(一 年)	159
14	ロシア・カスピ海地域の石油生産	160
13	ロシア・カスピ海地域の天然ガス生産	162
12	カスピ海地域の主要油・ガス田	166
11	ロシアの石油生産予測に関する諸見解	175
10	ロシアの天然ガス生産予測	180
9	各原油輸出ターミナルの能力と稼働状況	192
8	欧州市場向けの新規石油・天然ガス・パイプライン	200
7	ロシアからの北東アジアへの石油・天然ガス・パイプライン	206
6	カザフスタンからの新規パイプライン計画(完成済みも含む)	221
5	トルクメニスタン・アゼルバイジャンの石油・天然ガス・パイプライン	236
4	米国DOEの予測する地域別の石油需要見込み	246
3	米国DOEの予測する地域別の天然ガス需要見込み	247

石油大国ロシアの復活

著者紹介

もと むら ま すみ
本 村 眞 澄 (MOTOMURA Masumi)

- 1975年 東京大学理学部地質学科卒業
1977年 東京大学大学院理学系研究科地質学専門課程修士卒業
1977年 石油公団入団
主に技術，プロジェクト分野を歩く。海外では，オマーン，米国(ヒューストン)，アゼルバイジャンのプロジェクトに従事。
2001
～02年 オクスフォード・エネルギー研究所客員研究員
2004年 独立行政法人石油天然ガス・金属鉱物資源機構へ移籍
現在，石油・天然ガス調査グループ主席研究員(旧ソ連担当)

(主要著書)

『ガイドブック 世界の大油田』(共著) 技報堂出版 1984年

石油大国ロシアの復活

アジアを見る眼 108

2005年3月31日発行 ©

定価： 本体1,400円 + 税

著 者 本村眞澄

発行所 アジア経済研究所

独立行政法人日本貿易振興機構

千葉県美浜区若葉3-2-2 〒261-8545

研究支援部 電話 043(299)9735(販売)

FAX 043(299)9736(販売)

E-mail: syuppan@ide.go.jp <http://www.ide.go.jp>

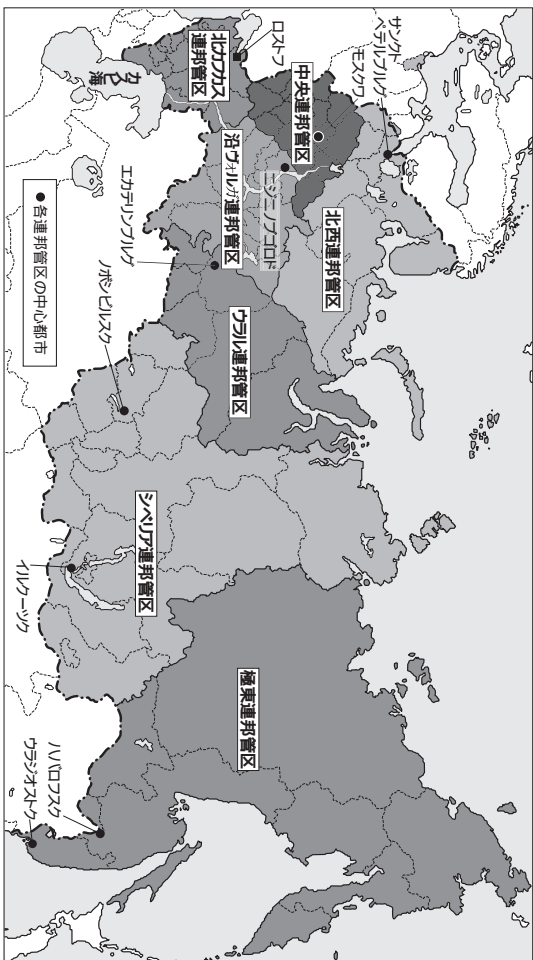
製 作 (株)弦

落丁・乱丁はお取替え致します

無断転載を禁ず

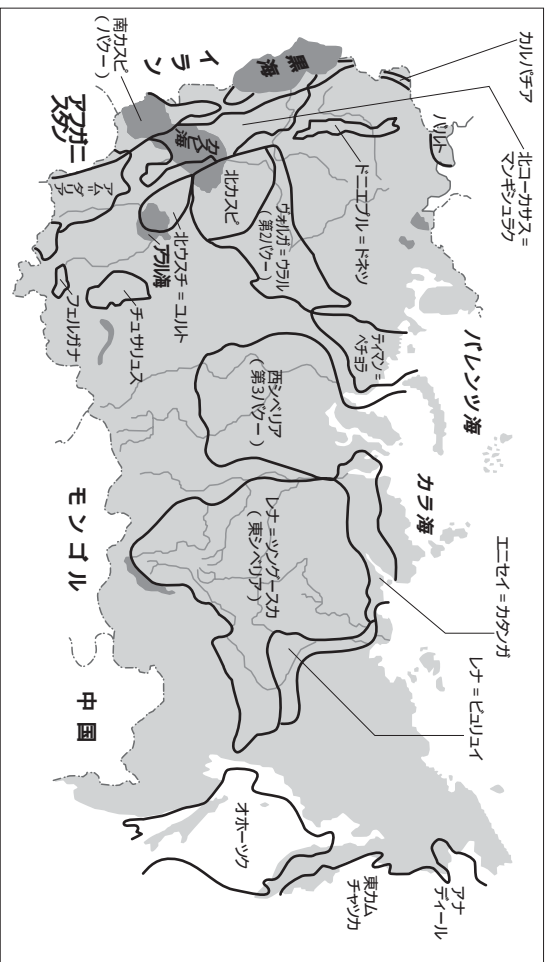
ISBN4-258-05108-X C1233

ロシアの7連邦管区区分図



(出所) <http://www.hi-net.zaq.ne.jp/nizhniy-kobe/rajon.htm> より作成。

ロシア・カスピ海諸国の堆積盆地分布図



(注) 堆積盆地：石油を生成するエリア。ロシアの石油産業の中心はバクーの後，第2バクー（ヴォルガ＝ウラル），第3バクー（西シベリア）へと間断なくバクトンタツチされていった。

(出所) Semenovich 他(1976)によるソ連邦石油地帯図(出典：Maximov(1977))。

地中海から太平洋まで、この広くアジアと呼ばれる地帯には幾十かの国がある。その大部分は第一次世界大戦以後古い植民地体制から脱して新興の独立国となったものである。世界の人口の半ば以上のものがここにあり、これらの新興国はそれぞれの立場に立つて、建国創業の仕事に力をつくしている。

その業は果たして障害なく着々と進んでおるか。だれもがこれに対して頭をかしげるであろう。そしてだれもがアジアは「流動的」であるという。

流動的とは何であるか。また何でないか。いくたの混みいった事態のなかを、一本の金の線が生々発展的に縫っているのも流動的である。経済は着々と成長し、政治は一つの体制のなかで徐々に整備されているような場合がそれである。

アジア諸国の大部分については、事態はこのように簡単ではない。もちろん、経済の場面には大きな発展・成長の芽生えはある。しかし、他面においてそれを抑制するものが力づよい。またおよそ発展や成長を考へる場合、在来流の理解によるパターンを以てするのが果たして正しいか、との疑問もでてくる。さらに政治体制については、イデオロギーの対立、複合民族国家における特殊なナショナリズムに伴う民族や種族間の闘争があつて、政治的安定はなかなか期すべくもない。独立国家の幼年期に伴う政治的、行政的未熟もまた考へられるべき大きな原因である。

こういう次第で、アジアが流動的であるとは、一つの混沌を意味するものといえようか。そしてその上に立つていかなる経済・社会・政治の体制が整いだされるであろうか。この意味で二世紀後半のアジアは世界における「問題」、いな最も大きな「問題」である。

アジア経済研究所は、まさにこの「問題」の理解に向かつて、ひたすら前進をつづけている。われわれの期するところは、まさにそれぞれの国の現実に即した精確な知識を供しよう、そしてこの大きな「問題」について静かなサーピスをいたそうとするに尽きる。設立以来すでに七十年余り、専らそういう道を歩んできたし、今後もそれに変わりはない。このシリーズは、多くの研究や調査の報告書、現地調査を土台として、アジアについての解説書・教養書たることを目標とするものである。

一九六六年三月

アジア経済研究所 東畑精一